

保育研究における環境論の比較

永 野 泉

(2005年10月13日受理)

要 約

「環境」という言葉は本来生物学の分野で使用され「生活体を取り囲む外界であり主体の生存と行動に関係があるもの」をいう。現在は生物学の分野以外に心理学、医学、物理学、化学、社会科学など多くの分野でも使われている。

教育学、保育学の分野では現在でも近代教育の思想家であるルソー、フレーベル、デューイ、モンテッソーリ等が述べている環境論を引用して、教育における環境の重要性を説明しておりこれらの思想が受け継がれている。

また昭和23年に公布された学校教育法第77条でも「幼稚園の目的」は「適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する」と示され、さらに平成元年の「幼稚園教育要領」の改定では「幼稚園教育は、幼児の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする」と「環境」を通しての教育を行うことが明記された。

保育において「適当な環境」としての具体的な環境構成を行う場合の考え方としては大きく二つに分けることができた。すなわち「ねらいを達成するための環境構成」と「自発的活動を確保するための環境構成」である。

実際にどちらの環境構成を行うかについては現場の保育者に委ねられているわけであるが、幼児の特性や教育的視点から考えた場合「自発的活動を確保するための環境構成」を選択すべきであろう。しかしこの場合子どもが自発的に活動できる環境を保育者が準備するためには幼児の発達段階はもとより、その時々興味や関心を把握し、子どものつぎの活動を予測する必要がある。これは保育者があらかじめねらいを決め環境を設定してそれに導く保育と比較した場合よりも、より高度な観察力、洞察力、経験などが要求されよう。この点からも環境構成を問題とすることは、すなわち保育者の資質や能力とも大きくかかわってくる問題といえる。

キーワード 環境、環境構成、自発的活動、ねらいの達成、保育者

1

はじめに

近年「環境問題」「地球環境」などが話題にのぼることが多く「環境」という言葉をしばしば耳にする。また、このほかにも「社会環境」「家庭環境」など環境という

言葉は広く一般に使われている。

幼児教育でも「環境」という言葉はよく用いられる言葉の一つである。幼稚園教育要領によれば、幼稚園の教育は「環境を通して行う」と明記されており、保育所保育指針もこれに準じている。また保育の現場においても「環境設定」「保育環境」といった言葉が使用されている。

本稿では幼児教育において「環境」という言葉はどのような意味をもち、どのように使われているのか、これまでどのように論じられてきたのかについて環境に関する論文や著書を比較検討することによって考えたい。

I. 「環境」の概念

環境という言葉はいろいろな分野で使われている言葉であるが、一般にはどのように使われているか『世界大百科事典』をみることにする。本書によると「環境：一般に、生物や人間を取り巻く外界（環境）のうち、主体の生存と行動に関係があると考えられる諸要素・諸条件の全体を環境という。

『環境』という語は、遅くとも中国の元代の文献にみられるが、これは四周を囲われた地域という意味にすぎない。西欧語の訳語として広く使用されるようになったのは近年のことである。……

現代的な意味での環境という語の使用はA. コントのミリュール（仏：環境一筆者）に始まる。コントはそれを『すべての有機体の生存に必要な外部条件の全体』と定義した。生物とミリュールとの問題を初めて本格的に論じたのは『動物哲学』を書いたJ. B. de ラマルクであった。』¹⁾と述べている。現在使われている「環境」という言葉は本来生物学に由来していることが分かる。

また『新・教育心理学辞典』によると「環境：生活体を取り囲む生命活動空間の総体を意味する。……環境は生活体に対立し独立した客体として存在するのではなく、なんらかの仕方で生活体の生命過程と意味関連、構造関連を保ちつつそれに参与している。……環境概念は生物学はもとより、社会学、文化人類学、心理学、教育学など広く人間科学における環境把握の基盤となっている。」²⁾と述べており、現在は多方面の分野で「環境」という言葉が使用されていることが分かる。

次に山田敏によると「今日の各種の学問分野での『環境』研究は、『環境』の扱い方についてきわめて『限定的』であり、『具体的』であり、『独自の』な側面を持っているといえる」と述べ、社会科学、生物生態学、医学における「環境」の考え方について考察している。これによると、「社会科学的分野における『環境』は、一言でいうならば、社会・心理的な見方で『環境』をとらえようとしている。したがって、自然科学を対象とするような『物理的環境』への関心はきわめて薄い。……

生物生態学の分野においては、少なくとも現段階においては、『主体的に本質的な影響を与える環境』のみを『環境』として扱っているといえよう。即ち、例えば『主

体の存亡や物質的变化に対して、本質的・決定的な影響を与えるような環境』のみを環境として認識し、それ以外のものに対する環境的関心はきわめて薄いといえよう。……

現代医学は、すくなくともこの三つの側面（物理・科学的環境、生物学的環境、社会・心理的環境—筆者—）からの環境を問題とし、あるいは、これらの三つの要因で規定される複合的『環境』を問題とし、そのような観点から医学的現象を具体的に理解しようとしている」³⁾と述べている。

山田は「環境」という言葉は生物学の分野をはじめ、社会科学、心理学、医学などいろいろな分野で用いられており、各分野における「環境」の概念はそれぞれ限定的、独自のであると述べている。

以上「環境」は本来生物学の分野で使われる言葉であり、生活体を取り囲む外界であり主体の生存と行動に関係があるものをいう。また生物学の分野以外にも心理学、医学、物理学、化学、社会科学など多くの分野で使用され、それぞれの分野で独自の使われ方をしている。

ではつぎに教育学の分野では「環境」という言葉をどのようにとらえているかみることにする。

II. 教育学・幼児教育における「環境」の概念

教育学において「環境」の概念を規定する場合によく引用されるいくつかの文献がある。これらの文献は、教育学における「環境」の基礎理論であり、現在の環境論にもなんらかの影響を及ぼしていると考えられる。次にこれらの文献が「環境」を規定する場合に、どのように引用されているかみていくことにする。

まず、山田敏は「園の『環境』の原理的考察」の中でデューイを引用して次のように述べている。「『環境』とは一体何であろうか。抽象的・一般的には、『環境』という言葉は、次のように規定できるであろう。即ち、『環境とは、主体をとりまいて、主体と交渉をもちつつ変化している総体である』と。デューイは、『教育』の観点から『環境』を重視し、『環境』を通しての『経験の組織化』の過程を論理的に位置づけようとしたが、彼は『環境』について次のごとく述べている。『環境』という言葉は、単に個人をとりまく周囲の事物を云うのではない。環境は主体の活動の仕方と周囲との特殊な連続を云うのである。……特に人間の場合には、時間的、空間的に遠いものが、かえって近いものより真に環境を形成することがある。人間の真の環境とは、人間がそれと共に変化していくものを云う』と。」⁴⁾

次に幼児教育では「環境」をどのようにとらえているであろうか。庄司雅子はフレーベルを引用して次のように述べている。

「たとえば、胎児は受胎と同時に両親からいろいろな素質や能力をもらいながら、母胎という環境で10か月間生活する。この間の胎児は吸いこみ、とりこむ力だけを持っている。だから母胎という環境が直接胎児の成長に影響する。誕生した嬰兒は成長を

つづけるが、この時の成長はただ環境から種々なものを吸いこみ、とりこむことがこの時期の唯一の仕事のようである。このことについて、フレーベルは著書『人間教育』の中で次のように述べている。『幼児はまず〔乳児—ちのみご—〕とよばれているが、幼児は全くこのことば通り、周囲の人々からいろいろなものを〔のみこむ〕段階にある。この段階にある幼児は多種多様なものを外からとりこむから、幼児の心全体が、大きな目のようなものである。……しかもこの幼児期にのみこんだものや幼い日の印象は、人の一生を通じて消え去ることがない。われわれが成長したのち、悪習慣のために苦しんだり、さまざまな悲しい運命にであうのも、ほとんどすべてその源はこの幼児期に発している。』

以上述べたように、幼児期はひたすらものをのみこむ時期であり、しかも一度のみこんだものは容易にとり去ることができないとすれば、幼児期における環境の教育的意義は、非常に大きいことになる。幼児期には教えるよりも、むしろ環境を調整するほうが、いっそう必要であるゆえんはここにある。⁵⁾

また細野一郎はルソーとモンテッソーリを引用して次のように述べている。

「人は無意識のうちに、周囲の環境の影響を受けて成長している。それは乳幼児から大人に至るまで程度の差こそあれ、年代を問わず同質の関係にあらう。なかでも幼い年代ほど……環境からの影響を大きく受ける時代はほかにはない。……

環境の影響を積極的に認め、意図的手段として取り入れようとした人々が多いが、なかでもルソーは、幼児期の教育は『消極的教育』でなければならないとして、次のような教育思想を展開している。『最初の教育は純粋に消極的でなければならない。初期の教育は、美德や心理を教えるのではなく、心を悪徳から、精神を誤謬から守ってやることである。』この消極的教育を支える手段として彼は環境を考えたのである。……

モンテッソーリもまた、教育は一方的に教え込むものではなく、環境を準備しあとは彼らの自発性にゆだねるものとした。『教育は教師がするものではなく、それは人間の中でひとりでの展開される自然の過程であって、言葉に耳を傾けて教わるものではなく、子どもが環境に向かって行動する経験によって得られるのです。教師の仕事は話すことではなく、子どものためにつくられた特別の環境で一連の文化的活動をやる動機を準備してやることです。』と子どもが環境に向かって主体的に行動する中で、子どもの本質が自由に表現できることを教育と考えた⁶⁾

4

以上、近年の教育学、幼児教育の分野で「環境」を考える場合、多くの研究者が近代以降の教育思想家の考えを引用して説明している。本稿では、デューイ、フレーベル、ルソー、モンテッソーリなどを引用して、教育における環境の重要性を説明している。すなわち近代教育以降の思想の中で繰り返し述べられている教育における環境の重要性は、現在も引き続き受け継がれていることが分かった。

Ⅲ. 幼稚園教育要領における「環境」

平成元年の「幼稚園教育要領」の改定でははじめて「幼稚園教育は、幼児の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする」と「環境」を通しての教育が明記された。しかし幼児教育においては、すでに昭和23年に公布された学校教育法第77条において「幼稚園の目的」は「適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する」とある。幼稚園教育ではすでに「適当な環境」を与えることによって行うことが示されているが、平成元年の幼稚園教育要領ではこのことをより明確にしたものといえる。⁷⁾

丹野嬉子は「環境を通しての教育」について「『環境』を通しての教育」……の「環境」とは、一言で言えば『幼児を取り巻く幼稚園にあるところのすべてのもの』である。……幼児の活動によって変化していく状況性をもつものが『環境』と呼ばれるものだと考えられる。言い換えれば、幼児自身が自ら主体的に働きかけ、自分達の場を得て生活し、生活する力を育てる場としての『環境』であり、幼稚園教育の内容、方法を含んだ教育環境であると考えられる。⁸⁾と述べている。

また、中沢和子は「教育要領の総則では、重要事項として、『園が幼児にふさわしい生活が行われる場である』こと、『生活の中心は子どもの自発活動としての遊びであり、指導は遊びを通して総合的に行うものである』こと、『一人一人の子どもの発達に応じた指導を行う』こと、の3点をあげている。言い換えれば、乳幼児の教育とは、子ども本来の生活を保障することであり、子どもが自発的に意欲をもって活動が出来るように環境を整えることである。また、乳幼児は生涯の間でも最も発達の速い時期なので、たえず環境を再修正して、個々の子どもの発達に応じていかなければならない。⁹⁾と述べている。

すなわち幼稚園教育要領における「環境を通しての教育」とは、子どもの生活の場を保障することであり、子どもが自発的に活動に取り組める環境を整えることであるといえる。またこの環境は子どもの発達や状況に応じて修正され変えられる必要がある。

では具体的に子どもが自発的に取り組める環境を整えるとはどういうことであろうか。つぎに保育における環境構成についての幾つかの考えについてみていくことにする。

Ⅳ. 保育における環境構成

保育における具体的な環境構成についてはどのような考え方があるのでしょうか。環境構成を行う場合どこに重点を置くかによって大きく二つに分けられる。すなわち

「ねらい」に重点をおいて環境構成を考える場合と、「子どもの自発性」に重点を置いて環境構成を考える場合である。

(1) ねらいを達成するための環境構成

まず保育者が考える「ねらい」を重視した環境構成のあり方について玉越三朗は次のように述べている。

「環境構成でもっとも重要なことは『経験や活動』をどのように環境として構成するかということです。……保育は適当な環境を与えることだといいますが、このことをいまのべた『経験と活動』の環境化という観点からみますと、つぎのことが含まれているといえます。①教師や保母が立てた指導のねらいに応じた『経験や活動』を選び、それを順序だてる。②その『経験や活動』を軸として、子どもが生き生きと安定感をもって、指導のねらいに即した活動を活発に営めるようにするとともに、子どもと教師や保母との心的交流が密接かつ効果的におこなえるような環境に、頭の中で組み立てる。③頭の中で組み立てたものを、予定した場所に実際に用意する。④用意した環境に子どもたちを誘い入れて思う存分活動させる。⑤活動の仕方がわからない子どもや興味がなくなってきた子どもに、個別に示唆を与えたり、環境を変化させてやりなどして、活動が活発に営めるように助け促す。」¹⁰⁾

また関口はつ江は次のように述べている。

「保育のための環境構成は、単にいろいろな遊具・教具・教材・素材などを組み合わせさせて配置したりする物の構成だけを指しているのではない。……

環境を構成する場合に、まず留意しなければならないのは、その環境が具体的なねらいの達成や内容の習得に適しているように環境構成することである。すなわち、あるねらいの達成や、そのための内容の習得をめざして保育を進めるためには、子どもの生活に即して、それぞれの時期にどのような体験を積み重ねることが必要かを明確にし、そのような体験がえられるような活動が展開されることを予想して、それに適した環境を構成することが必要である。このような意味で、『環境の中にねらいを含ませる』という言い方がなされたりする。」¹¹⁾

以上、玉越と関口の環境構成に対する考え方をみてきたが、この両者がまず重視することは保育者の立てたねらいを達成するための環境構成を行うということである。さらに玉越は保育者が準備した環境に誘い入れるとしている。この両者の考え方はまずねらいを立ててそれを達成するために、保育者が環境を準備し、導くという方法から考えて、保育者が主導となるねらい達成の環境構成といえる。

つぎにこのねらい達成するための環境構成に対して子どもの自発活動を保障するための環境構成という視点から述べているものをみる。

(2) 「自発的活動を確保するための環境構成」

まず津守真は環境構成について次のように述べている。

「子どもがおとなに頼らないで、自ら生活し、活動することができるような場をつくらなければなりません。これがここでいう環境を作るということで、保育者の指導の基本となります。……①子どもの生活空間、又は物理的環境が考慮されます。……じゅうぶんな空間、それぞれの年齢に適当な材料、どんなときでも数人が落ち着いて仕事をするような場所……②精神的な環境……子どもが安定した気持ちで生活していること、誰もが自由に思ったことを話すことができようふんい気……③時間……子どもが生活するのに必要なだけの時間をたっぷりとっておくこと。」¹²⁾

つぎに神長美津子は次のように述べている。

「環境の構成において重要なことは、幼児の主体的な活動を確保することである。……

幼児の活動への意欲や主体的な活動の展開を促すためには、単に必要な教材や用具などの物的な環境を整えれば十分というわけではない。幼児自身がそれらと何らかのつながりを見だし、幼児がかかわらずにはいられないと思うような状況をつくり出すことが重要である。そのためには、幼児の発達を考慮することはもちろん、興味や関心、これまでにいたる生活の流れなどを十分考慮して、幼児が環境とつながりを見いだせるようにする必要がある。……

『環境を構成する』とは、さまざまな環境の要素を関連づけて、幼児が思わずかかわりたくなるような状況をつくり出すことである。……

幼児の主体的な活動を生み出す適切な環境を構成するためには、①幼児の発達に即したものであること、②幼児の興味や欲求に応じたものであること、③幼児の生活の流れに即したものであること、などの視点から考える必要がある。」¹³⁾

この両者の考えは、子どもが自発的に生活し、活動する場や状況を作り出すことが出来る環境構成ということである。この環境構成では子どもが主体的に生活し、活動を展開するための環境をつくるということである。

環境構成について具体的には「ねらいを達成するための環境構成」と「自発的活動を確保するための環境構成」という二つの考え方があるが、では実際の保育現場ではどのように環境構成がなされているのであろうか。

(3) 「保育者のあり方が決定する環境構成」

園の環境構成について山田敏は次のように述べている。

「園の環境はほとんど無限の観点から問題にすることができる。ここでは、保育活動の導き方という観点から、即ち、子どもにあたえる保育内容が、基本的にどのような条件を備えるべきか、という観点から、園内の子どもの環境を考えてみたい。……ここで挙げた一組の条件、即ち『その、保育活動が、子どもにとって楽しいもの』であり、かつまた、『その後の発達を豊かに保障する土壌となるっていること』という条件は、『環境』が園内に限って見た場合、それは物的環境が決定的な影響力を持っているのではなく、保育者が決定的な影響力を持っていると考えるべきであろう。確

かに保育者自身が物的環境その他の条件によって左右されているが、ここに挙げた一組の条件は、『保育者のあり方』によって基本的に左右されると考えざるを得ない。この点で、園の環境を問題にする場合『保育者のあり方』の重要性が指摘されなくてはならない。』¹⁴⁾

山田の述べる通り、実際に環境構成を行うのは現場の保育者であり、保育者の保育観、環境に対する考え方、などによって規定されると考えられる。保育者は園における人的環境であると同時に、実際保育環境を整備する決定的な影響力を有しているといえる。

では保育者が実際の環境を構成する場合、前述の「ねらいを達成するための環境構成」と「自発的活動を確保するための環境構成」のどちらを選択すべきかを考えたとき、保育者はまず幼児期の子どもにとって最も尊重されるべきものは何なのかを考慮することが必要であろう。

この点について幼稚園教育指導書において「環境を通して教育を行うことの意味は、幼児の主体性を十分に発揮しながら生活し、幼児期に育つことが期待されているものを着実に獲得していけるようにすることを目指している。……その具体的な活動の選択、展開については幼稚園教育指導要領の「指導計画作成上の留意事項」から ① 具体的なねらいや内容に基づいて環境を構成する。 ② 幼児が自ら環境にかかわって活動を展開する。 ③ 幼児が望ましい方向に向かって活動を展開していけようように教師が適切な援助をする。』¹⁵⁾と述べている。ここで①の「具体的なねらいや内容に基づいて環境を構成する。」という記述からすると保育者がまずねらいを設定して環境を構成する「ねらいを達成するための環境構成」のように読み取れる。しかし幼稚園教育指導書を読み進むとこの項目の解説として「幼児の行う具体的な活動は教師の適切な援助の下に、幼児が環境とのかかわりを通して選択し展開されるものであり、幼稚園教育要領に示された領域のねらいや内容と直接的、固定的に対応したものであったり、教師が一方的に選択して幼児に与えたりするものではない。』¹⁶⁾と述べており、あくまでも幼児が自発的に選択し展開された活動を重視している。

幼児期の子どもはその特性として、興味や関心をもったものは自分から関わろうとする時期である。また、幼児期は公教育の最初の時期であることを考えると、ねらいを立てて何かを教育することよりも、まず子ども自身が自発的に関わろうとする力を育てることが大切だと考えられる。そのために環境構成においてはこうした能動性が十分に発揮されるような対象、時間、場などが用意されることが重要であろう。

8

山田が指摘する通り園内の環境を問題とすることはすなわち保育者の問題である。保育者は幼児期の子どもが自発的に活動できる環境を準備するためには幼児の発達段階はもとより、その時々興味や関心を把握し、つぎの活動を予測する必要がある。自発的活動を確保する環境構成は、保育者があらかじめねらいを決め環境を設定してそれに導く保育と比較した場合、より高度な観察力、洞察力、経験などが要求されよう。この点からも環境構成を問題とすることは、すなわち保育者の資質や能力とも大

大きくかかわってくる問題といえる。

まとめ

「環境」とは本来生物学の分野で使用され「生活体を取り囲む外界であり主体の生存と行動に関係があるもの」をいう。現在は生物学の分野以外にも心理学、医学、物理学、化学、社会科学など多くの分野で使用され、さらにそれぞれの分野で独自の使われ方をしている。

また教育学、保育学の分野では現在でも近代教育の思想家であるデューイ、フレーベル、ルソー、モンテッソーリ等が述べている環境論を引用して、教育における環境の重要性を説明している。すなわち近代教育以降の思想の中で繰り返し述べられている教育における環境の重要性は、現在も引き続き受け継がれているわけである。

また昭和23年に公布された学校教育法第77条でも「幼稚園の目的」は「適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する」と示されている。さらに平成元年の「幼稚園教育要領」の改定では「幼稚園教育は、幼児の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする」と「環境」を通しての教育を行うことが明記された。

保育において「適当な環境」としての具体的な環境構成を行う場合の考え方としては大きく二つに分けることができた。すなわち「ねらいを達成するための環境構成」と「自発的活動を確保するための環境構成」である。

けれども実際に環境構成を行うのは現場の保育者であり、保育者の保育観、環境に対する考え方、などによって規定される。保育者は園における重要な人的環境であると同時に、実際保育環境を整備する決定的な影響力を有している。保育環境を整備するのは保育者であり、「ねらいを達成するための環境構成」と「自発的活動を確保するための環境構成」のどちらを選択し実施するのかはそれぞれの保育者に任されている。しかし幼児の特性や教育的視点から考えた場合「自発的活動を確保するための環境構成」を選択すべきであろう。けれども保育者は子どもが自発的に活動できる環境を準備するためには幼児の発達段階はもとより、その時々興味や関心を把握し、子どものつぎの活動を予測する必要がある。これは保育者が予めねらいを決め環境を設定してそれに導く保育と比較した場合、より高度な観察力、洞察力、経験などが要求される。この点からも環境構成を問題とすることは、すなわち保育者の資質や能力とも大きくかかわってくる問題といえる。

9

注

- 1) 『世界大百科事典』第6巻, 平凡社, 1988, p.327.
- 2) 藤原喜悦〔ほか〕編『新・教育心理学辞典』金子書房, 1977, p.130.
- 3) 山田敏「園の「環境」の原理的考察」『保育学年報1977年版』フレーベル館, p.36-38.
- 4) 山田敏 前掲書3) p.36.

- 5) 庄司雅子『幼児教育の原理と方法』フレーベル館, 1969, p.133-134.
- 6) 日名子太郎〔ほか〕『保育内容 環境』(改訂版) 学芸図書, 2000, p.31-33.
- 7) 領域『環境』は、子どもの自然や社会事象など身近な環境にかかわる力、心情、意欲、態度を育てる観点から、ねらいや、内容をまとめたものである。すなわち環境に関わる主体としての子どもの側から教育のねらいや内容を示したものであり本稿の「環境」論とは方向が異なるのであえてここでは取り上げないことにする。
- 8) 丹野嬉子「現場からの視点で領域『環境』を読む」『新幼稚園教育要領の読み方』建帛社, 1989, p.87.
- 9) 中沢和子『〈改訂〉子どもと環境』萌文書林, 2000, p.5-6.
- 10) 玉越三朗『保育の環境をつくる』小学館, 1977, p.22.
- 11) 関口はつ江『保育原理』建帛社, 1998, p.107.
- 12) 牛島義友〔ほか〕『保育原理』金子書房, 1956, p.88-93. (一部要約した)
- 13) 神長美津子「環境の構成」『子どもと環境 理論編』第3章, 三晃書房, 2001, p.26-28.
- 14) 山田敏 (前掲書3), p.41-46.
- 15) 文部省『幼稚園教育指導書』(増補版) フレーベル館, 1989, p.77.
- 16) 前掲書15) p.78.